

関西の伝統文化と 先端産業技術

編集にあたって

特別小特集編集委員会委員長 高橋達郎

関西支部がカバーする2府4県（大阪府、兵庫県、京都府、滋賀県、奈良県、和歌山県）は、国土面積の7%、人口の16%を占めています。文化庁の統計（www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/shitei.html）によれば、国宝の約6割、重要文化財の約5割が関西支部地域にあります。その中でも、存在感の大きな建造物に限ると、国宝264棟のうち73%に相当する193棟が関西支部地域となっています。東京からの出張を終えて京都駅に降り立つとほっとするのは、私に限らず会員諸兄に共通の経験だと想像します。一方産業界に目を転じると、関西支部地域には、本会と関わりのある先端的な電子産業分野において、グローバル競争の中で活躍している企業がたくさんあります。デジタル家電、通信モジュール、電子部品、バッテリーなどが代表選手です。そこで、「関西の伝統文化と先端産業技術」をテーマとした特別小特集を企画しました。

伝統文化のコーナーは、伝統文化とICT技術の関わりを切り口としています。美術品や文化財をデジタルアーカイブとして保存し活用することが広く行われています。キー技術となるデジタル撮影・画像処理・表示技術を、日本写真印刷の橋本氏に紹介して頂きます。また、高松塚古墳壁画のデジタル記録を担当されている岡村印刷工業の宮内氏には、失敗が絶対に許されない現場での御苦労も紹介して頂きます。研究分野に目を転じると、美術品の保存のみでなく、伝統行事など無形文化財を対象とした研究も行われています。伝統行事や伝統芸能の保存や分析から更に一歩進んで、バーチャルな伝統行事の再現を立命館大の八村氏に御紹介頂きます。京

都府立医大の外科医である島田氏はLED照明のベンチャー会社を営んでいます。様々な人との出会いを通じてどのようにして清水寺の仏像を白色LEDで照らすに至ったかを紹介して頂きます。

関西のもう一つの特徴である先端産業技術については、編集委員会で次のような議論がありました。1点目は「先端産業技術」の「先端」が「産業」を修飾するのか、「技術」を修飾するのかという点です。編集委員会では、「先端産業」の現在の実用技術レベルを御紹介頂くのが読者諸兄に有用であろうと考えました。2点目は、浮沈の激しい産業界に関わるテーマ選定の難しさです。編集委員会発足から特別小特集発行まで1年余りですが、関西を代表していたTV業界は大きな苦労に直面しています。粘り強い関西人は、携帯電話やタブレット端末向けのタッチパネルなど新しい分野に活路を見いだしていくものと期待しています。本特別小特集では関西の先端産業技術として、シャープの八代氏にタッチパネル技術を、パナソニックの湯浅氏にリチウムイオン電池の開発動向を御紹介頂きます。また、震災以後エコ技術が一層の注目を集めています。関西電力の安並氏、三菱総合研究所の井上氏、阪大の鷺尾氏には太陽光発電を電力システムの中に安定的に取り込むために必要な日射強度の推定技術を御紹介頂きます。関西地域のユニークな活動として、中小企業と大学により3年前に打ち上げられた人工衛星「まいど1号」があります。ネーミングと相まって社会に元気を与えました。阪府大の大久保氏からは、「まいど1号」以降の取組みを紹介して頂きます。

関西地域は、これまで東京と対比されることが多かったように思います。社会が豊かであるためには、多様性が必要です。これからの関西は、東京との対比ではなく、日本の中で、世界の中でユニークな地位を保ち、そのユニークさに一層磨きをかけることを期待します。

平成24年10月号特別小特集編集委員会

委員長 高橋達郎（京大）	顧問 小山正樹（EASE創研）	幹事 新熊亮一（京大）
委員 岡田実（奈良先端大）	委員 山田誠（阪府大）	委員 山下洋一（立命館大）